

自由律俳句論の一難點

田 中 俊 一

茲にとり上げた「自由律俳句」に關する問題は別に事新しいものではなく、俳人や詩人達の之に對する批判や意見は既に論じ盡された觀さへある。それにも拘らず敢て此の問題をとり上げたのは、自由律俳句の可否を更に論ずる爲ではなく、又俳句の將來に就いて辯ずる爲のものでもない。

日本の抒情文藝を考察するに方つて、之を學的對象として分類する場合、和歌・連歌・俳諧・詩に於て把握するのが妥當のやうであり、夫々が一の體系を有するものではあるが、大局から之を史的に觀察するとその主流が和歌から連歌へ、連歌から俳諧へ、俳諧から詩へと推移してゐるのを見出すのである。此の中俳諧より詩への推移は、史的必然性として論ずるには些か躊躇するのであるが、自由律俳句の勃興に於て兩者に通ずる共通問題と、相互の關係の淺からぬ因縁とを發見する。そこで自由律俳句の成立が日本抒情文藝史に於ける俳諧より詩への展開の一斷面を構成してゐると考へ度いのである。勿論自由律俳句の勃興に先立つて既に近代詩が発生し、その豐醇な實を結んでゐたといふ事は周知の事實であり、或意味では却つて詩の影響を受けて自由律俳句の問題が論じ始められたとも考へられるのである。然し乍ら自由律俳句論が俳諧的世界の終末を暗示し、近代詩のより新しき飛躍への一契機を示したといふ事も認められなければならない。俳句が言語の存在する限り今後も創作されて行くであらうのに敢て俳諧的世界の終末といひ、之に代るべきものとして詩を持ち出したのは、この小論が日本抒情文藝史の一斷片を取扱はふとしたに他ならないからである。

「定型派の人達は『はじめに形式あり』と考へてゐる。私達は『はじめに言葉あり』と考へる。こゝに詩が誕生し、俳句が誕生するのだ。定型派と私達との開きは、この出發點からはじまつてゐる。」（「俳句の出發點」俳句文學全集萩原井泉水篇二四四頁）

右は「層雲」（昭和九^年七月）に於て發表されたといふ「俳句の出發點」と題した萩原井泉水の文章である。彼が用ゐた「形式」と「言葉」とは定型派と自由律派とに一線を劃する對照的素としては餘りにも漠然とした用語であつて適當であるとは思へないが、「形式」は「結昌體の美」であり、「言葉」は「生命の感じをうつすものである」といつてゐるのに依れば、單に出發點のすれからのみ生ずる相違ではなく本質的な相違を指してゐるものゝ様に感じられる。彼の形式觀を今考察してみるに、井泉水は定型派の俳句の形式を分析すると三角式連合であるといふ。⁽³⁾五七五といふ三節に三個の觀念を夫々當嵌めて之等を連結せしめると最も簡單な俳句的表現が成立する。それが和歌的連想形態から脱け切らぬ初期の俳諧にあり勝ちな單獨體の句であつても、因襲的連想を離れた配合體の句であつても、「何れも三點を連結せしめる幾何畫法に類してをる」として、新傾向俳句の形式的革新はこの三角式連合を破るに在るといつた。その爲には先づ季題趣味を斥けねばならないのである。即ち彼に依ると、三角形式の中心點を形造るものが季題趣味であるから所謂中心のない句を作ることが俳句の新形式でなければならぬといふ。⁽⁷⁾この無中心説は彼に始まつたものではなく、既に加東碧梧桐が新傾向俳句を論ずるに方つてその根據としたところである。⁽⁸⁾碧梧桐は、

「季題の抽象的感じを助ける爲に自然を借る手段を捨て、自然を忠實に敘述して、それが季題との交渉を得るやうにし、引いては自然の見方の制限的ならずして、解放的な事に基礎を置かんことを欲したのである。」（「俳句無中心論」俳句文學全集加東碧梧桐篇三六七頁）

と述べて先入觀的な花鳥諷詠精神の形式化であるところの季題趣味を極力排してはゐるが、自然の忠實な描寫として

の季題を否定してゐるのではない。つまり季題の有する固定した趣味ではなく未發見の趣味を詠じ出すべきだといふのである。それは言語の意味内容の歴史的變遷或は社會的環境の推移等と共に一個の言語を媒介として新しき美を創造して行く事が可能であると言はんとしてゐるのであるが、それには或程度の限度がある。社會生活の複雑化と共に思想や感情もそれにつれて複雑になると、特定の語の持つ意味内容は擴張されるけれ共、限界に達すると別個に新しい語彙の創造される場合が多い。故に一應季題を認めて置いてそれに新しい感覺を盛つて行かうとする場合には、どうしても究極に於て飽和狀態的な一障害に到達するのである。井泉水はかゝる意味から碧梧桐の無中心説を更に押し進めて季題の完全追放を宣言したのであつた。即ち調和的美感を根底に置いて自然を觀察し取材の手段が配合的である場合には季題に權威があるけれ共、之は改めるべきであつて季題は「たゞ個々吟境の對象たる一部に過ぎないものである」から「光と力との自然觀」を根底に置くべきであるといふ。⁹⁾この光と力等といふのは抽象的曖昧な言葉だが、前後の意味からみて配合式取材の如くに觀念連合の世界を構成するものではなく、對象把握の仕方が直接的であり個性的であることの原動力となるものを指すのであらう。従つて彼は、

「私は信ずる。——俳句はたしかに季題を離れて存立し得る。季題なるものは、單に一種の約束に過ぎない。又古代よりの因襲に過ぎない。」

私は信ずる。——俳句は季題を離れて作られるやうになつてこそ、ほんとうに生長するのである。季題は俳句の生きた肉に蔽めた木柵である。我々は先づ之を脱しなければならぬのである。」「(俳壇傾向論「一八六頁」)

と叫んでゐるのである。俳句的表現に於ける一要素としての季題は、茲では全く一の古びた「型」以外の何物でもなくなつた。藝術が生きた人間の魂に觸れるものであり、感情をゆさぶるものである限り、死せる「形式」は何の價値をも有ち得ない。却つてその様な「形式」は眞率な表現を損ふものである。井泉水が季題をかくの如く一の古びた「形式」と見て之に反旗を翻したのは或意味では確かに意義あることであつた。その彼にとつて今一つの問題は十七音と

いふ定型である。之に就ては「季題無用と定型揚棄とは車の兩輪の如きものだ⁽¹⁰⁾」といふ彼の言葉を借りる迄もなく、俳句革新論者には常につきまとつてゐたものである。即ち、

「十七^三といふ型體に俳句性があるといふ程度の理解をもつては、俳句の詩性はほんたうに解るまいと思ふ。」
息」俳句文學全集萩原井泉水篇一八一頁

といふ彼に於ては韻數律は詩の本質とは餘程かけ離れた存在であつたのだから、俳句の本質を表現することを第一義とする以上定型も亦季題と共に古びた「形式」でなければならなかつた。そして俳句の誕生を、詩の誕生を、「言葉」に於て認めようとしたのである。若し「はじめに言葉あり」から出發しないで、「はじめに形式あり」から出發する俳句があるならば、それは自ら詩である權利を放棄して遊戲に墮したものである。この様な意味での「言葉」は詩一般の有する原理的なものであるから、之を「俳句」であらしめる爲にはその「言葉」の作用を一層特色づける必要がある。そこで彼は「先づ言葉を散文的な言葉の中から隔離する」ことを説き、さうすることに依つて得た詩的言葉は「其自體のもつ質量と磁性」とによつて引き合つたり反撥し合つたりするといふ。さういふ言葉の引力を利用した表現を俳句的表現といふのであつて、

「公式的に言へば、一句はA B C Dの四語から構成せられ、此中二語はプラス量をもち、他の二語はマイナス量を持つ。」
「俳句の公理」俳句文學全集萩原井泉水篇二四六頁

と、短詩形としての俳句の言葉の作用を簡潔に言ひ表はさうとしてゐるが、一句をA B C Dの四語に分析した規準がこの斷片的な文章の中からは明確に汲み取れないから、その規準の設定の方法如何に依つては他の短詩形文藝にも適用され得るものであつて、俳句的表現の特色を述べたものとしては不充分である。之を補ふかの様に、

「力の印象は疾凡のやうに咄嗟に發するものである。それを捉へるには短くして鋭い詩形でなければならぬ。

こゝに於て、私は俳句といふ詩形を選ばねばならなくなる。印象の詩として存立する純なる藝術は俳句であると思

ふ。」「〔俳壇傾向論〕一八四頁)

と述べてゐて、俳句を「短くして鋭い詩形」「印象の詩」として特色づけたのである。井泉水にとつては五七五、十七音の韻律美や形式美は問題でなく、「短くして鋭い詩形」であることのみが重要だつたのであり、花鳥諷詠精神や季題趣味が俳句精神の構成要素ではなく、「印象の詩」であることが最も俳句的だつたのである。彼は俳句につきまゝとつてゐる「何等かの數學的法則によつて規定されてゐるところの、特殊なクラシカルな形式」⁽¹¹⁾の一切を排除したばかりでなく、花鳥諷詠精神や季題趣味をも古びた一種の「型」と見做して斥けてをり乍ら猶且「俳句といふ詩形」の存在を認めてゐるのである。従つて彼の所謂「詩形」は「内容」に對する「形式」といつたものではなく、「表現そのもの」を指すのであらう。その場合に於て「短くして鋭い詩形」や「印象の詩」等は俳句が詩であることを強調するのには適當な言葉であるが、その詩が俳句であるといふ條件としては不充分であることを認めざるを得ない。表現對象に關する彼の態度にも同様な傾向がみられるのであつて、

「我々の對象となるものは、新しく展かれたる自然と人生とである。其に對する觀照の深さから俳句が生まれてくる。四季に關する事象のみが俳句を産むのでもなく、況や俳句は斯様な季題のみを詠すべしといふやうに其對象を限らるゝ譯はない。」「〔俳壇傾向論〕一八五頁)

と述べてゐるところの「新しく展かれた自然と人生」が俳句の世界のみの對象であるといふ論法は成立たない。「觀照の深さ」も俳句の特權ではない。自由律俳句論がかうした論である限り、十七音形式で「四季に關する季題」のみに表現對象を限定しようとする定型派の、陳腐ではあるが俳句の構成要素を明確に割り切つてゐる理論に對抗することは困難であらう。

右の如くに井泉水の自由律俳句は從來の「型」を無視して俳句の形式的革新を成し遂げて、彼が「一本の槍」⁽¹²⁾と名付けた「俳句の精神」は堅く守り得てゐる積りだつたのである。だから自由律俳句論に對する反駁が、それは新し

き詩形であつて俳句の世界を逸脱したものであるといふにあつたにも拘らず、井泉水がその作を歌と呼ばず詩と呼ばずやはり俳句と呼んでゐたのは俳句の形式を打破しても「俳句の精神」を表現しさえすれば俳句であるといふ見解をとつてゐたからであらう。だが形式的革新が内容にも革新を齎したことに彼は氣付かなかつたのである。近代の詩が新形式の創造と共に新しき藝術的世界を開拓して行つた歴史的事實の中に、俳句だけが例外的地位を占める筈がない。従つて井泉水の新形式が表現したところのものは、他の詩人達が新表現の爲にその詩形を俳句形式に接近させようとしたのと非常に似通つた性質のものとなつて了つたのである。白秋の「短唱」⁽¹³⁾は新しき表現であることを自ら宣言した名稱であつたが、井泉水の「連唱」⁽¹⁴⁾はそれが殆んど一篇の自由詩であり乍ら依然として「俳句的感度」を以て之を見ようとした所に、兩者の態度の相違を感じる。自由律俳句が實質的に新しき詩的表現であるにも拘らず俳句の精神を云々する限り「意氣込の文學」だとか「心の誠をつきとめようとする」⁽¹⁵⁾ものだとか言つても我々は格別な感銘を受けないのである。そこには新しい「俳句」があるのではなくして、新しい「俳句觀」⁽¹⁶⁾があるだけなのだ。

かくの如く俳句性を維持しつつその表現形式を革新しようとする方法は、近代の詩論を借りる迄もなくナンセンスであり不徹底な態度であつた。井泉水は詩である俳句を、詩本來の姿である歌ふべきものに還元することに問題の出発點を置いてゐる。だから「意氣込の文學」だとか「心の誠をつきとめようとする」ものだとか言つたのであるが、かやうな態度と方法は、大正末期のプロレタリア詩が取り上げたのと同じやうな傾向であつた。即ち萩原恭次郎が「死刑宣告」に於て、

「何物かを神聖化してゐねば、安心してゐられない群羊！神聖化する事によつて、價值を認めようとする臆病！汝自身を常に不自由に一つの檻をつくつて監禁し、汝自身を定型によつて住まはせねば安眠出來ぬ神經衰弱者！

偶像の義僕よ！」（『現代詩大系』第八卷）

と、詩に於ける定型派を罵倒に幾い強い叫び聲で以て批判してゐるのは、井泉水が既成の型は「純眞な詩的表現」を滿

たすことが出来ないから「個性の自覺が鮮かになればなるほど、さうした妥協的な態度に堪へられなくなつて来る」⁽¹⁷⁾と慨嘆してゐるのと全く同じ態度である。又、

「詩句を、一行を、散文的の如く重荷を背にして疲れしむ勿れ！次行まで叮嚀に運搬せしむ役を放棄せしめよ！獨特なる強烈なる哄笑であらしめよ！また絶叫であらしめよ！強き感覺を齎らしめよ！」⁽¹⁸⁾（『現代詩大系』第八卷）

は、そのまゝ井泉水の「先づ言葉を散文的な言葉から隔離する」とか「意氣込の文學」とかに通ずるものであり、「匕首の如き短き形」は「散文の如く重荷を背にした表現とは相容れないものである筈なのだ。更に、

「思ふ儘である、感じたまゝである。ただ走り出す、動き出す熱量である。力量である。一切の最大目的を達せんとする無目的である。」（『現代詩大系』第八卷）

といふ詩の革新派の叫びを、自由律俳句派では「調和的美感」を離れて「光と力」とに觸れよと言ひ、それが「李題無用」となり「定型揚棄」となつたのである。そして定型俳句の持つ趣味的遊戲的態度は眞實の表現といふ「最大目的」の前には何の意義をも有たなくなつて了つた。

この様に詩に於ける革命派と類似的の精神的基盤に立つた自由律俳句ではあつたが、遂に新しき詩の誕生の宣言はせずして、之を詩の一種と見做す人達に對する返答としては、「自由律俳句には俳句のリズムがあり、詩には詩のリズムがある」といひ乍らその「俳句のリズム」の解明を怠つてゐるのである。だが、「内容を端的に把握して焦點的につきつめてこれを一行に表現する」⁽¹⁹⁾と、内容把握の方法と表現形態とに言及し、更に「心象的」といふ語を使つて、

「其對象が如何に其作者の人間、心境、態度に依つて同化されてゐるかといふ事を表象せしめんとするのである。」

（『心象』俳句文學全集萩原井泉水篇七〇頁）

と俳句的表現態度に觸れてゐるのは注目に値する。之は明らかに芭蕉の所謂「造化にしたがひ造化にかへる」態度と根本に於て同一であり、井泉水が自由律俳句の精神を茲に於て把握しようとしたのである限り、蕉風俳諧の精神を近

代に再興せしめたものとは言ひ得る。然し芭蕉が西行の和歌、宗祇の連歌、雪舟の繪、利休の茶に貫道する一なるものを求め、能樂に觸れず、人麿を擧げなかつた理由は何であるか。「四時を友とする」精神が何に基因してゐるか。かゝる俳諧觀には假令表現素材が「四季に關する事象」のみに限定されてゐなくても、何等かの形で「自然」がその表現に参加してゐなければならぬ。井泉水の自由律俳句が「新しく展かれた自然と人生」にその對象を求めようとしたのは、傳統的な俳諧の世界から脱し去らうとしたのであるが——否それをも含めて更に廣い世界を歌ひ出さうとしたのであるが、その故にこそ自由律俳句は既成の俳句でも、歌でも詩でもない事が是認されねばならない筈である。即ち、

「歌のもつ好き味を詩のもつ好き味を何なりとも一つの爐竈に入れて、熔解して、新しきものとして再造する、この大きな力と、其力を出し得る形の源こそ、自由律俳句の精神である。」（「自由律俳句の精神」俳句文學全集萩原井泉水篇三二九頁）

と言つた右の爐竈の中では俳句も熔解して了つてゐるのである。従つて「短くして鋭い詩形」で以て「その内容を端的に把握して焦點につきつめてこれを一行に表現」した「心象的」「印象的」な新しき詩的表現としてのみ自由律俳句は存するのであつて、之は俳句に對する新しい解釋が新しい表現を誕生せしめたのであり、「俳句の精神」は茲では既に其の姿を留めてゐないのである。

註(1) 「日本文藝の表現」(實方清編著) 二頁參照。

(2) 定型の俳句にある美しさは、結晶體にあるやうな美しさだ。礦物的であり無機物的である。私達の求めるものは、有機物的なもの、生物的なるものだ。結晶的なるものを以ては、生命の感じをうつすことは絶対に不可能である。（「俳句の出發點」俳句文學全集萩原井泉水篇二四四頁）

(3) 「俳壇傾向論」(萩原井泉水著) 其六參照。

- (4) 井泉水は所謂「俳句」を季題の取扱ひ方といふ點から、單獨體と配合體とに分け、單獨體とは「和歌で云ひ古した趣向を俳句で云うてゐるもの」とし、歸雁といふ題による例句を挙げれば次の様なものであるといふ。

比翼かや羽を並べて歸る雁 貞徳

舟にのれ棹になりつゝ歸る雁 重次

〔俳壇傾向論〕萩原井泉水著 其一参照

- (5) 井泉水は配合體の句とは初期の多くは「季題と季題との寄せ集め」式な表現であつたが、芭蕉が新機軸を出すに至つて新しい趣味が構成されたといひ、芭蕉の「發句は物を取合せてすれば出来るものなり、それをよく取合するを上手といひ、惡しきを下手といふなり」といふ言を引いて説明してゐる。〔俳壇傾向論〕萩原井泉水著 其一参照

- (6) 「俳壇傾向論」(萩原井泉水著) 六七頁参照。

- (7) 同右七五頁参照。

- (8) 「俳句文學全集 加藤碧梧桐篇」俳句無中心論参照。

- (9) 「俳壇傾向論」(萩原井泉水著) 一八五頁参照。

- (10) 「俳句文學全集 萩原井泉水篇」一八一頁参照。

- (11) 「詩の原理」(萩原朔太郎全集3) 二二三頁参照。

- (12) 世間の人達が私達にしばしば忠告するのに、君等は俳句といふ名に未練をもつのではないか、歌にすべきものは歌に、詩にすべきものは詩にしたらばいいではないかと。——私達はめい／＼一本の槍をもつのだ。この槍を以て何もかも貫かうとするのだ。此一本の物をもつて凡てを貫かうとする意氣、それが自由律俳句の精神である。〔俳句文學全集 萩原井泉水篇〕 三二九頁

- (13) 「眞珠抄」〔現代詩大系〕第八卷 参照。

- (14) 「海潮の曲」(俳句文學全集 萩原井泉水篇二七六頁) 参照。

- (15) 俳句は「意氣込の文學」だと云へる。どこまでも物の眞に迫らうとする、心の誠をつきとめようとする。それが爲に、古來七首の如き形をもつてゐたのだが、それが定型的に鑄びて鈍つて用をなさなくなつた今日とて、其を棄てて更に新しい形を取上げたのだ。所謂、短律といふ極めて短い形を取上げたのも其の氣持だ。〔俳句の志向〕俳句文學全集 萩原井泉水篇 二四五頁

- (16) 「詩の原理」(荻原朔太郎著)第六章参照。
- (17) 「俳壇傾向論」(荻原井泉水著)一六一頁。
- (18) 「俳句の公理」(俳句文學全集 荻原井泉水篇二四六頁)参照。
- (19) 「パラフレズ」(同右一四五頁)参照。